

第2学年 国語科の実践

1 単元名 きつねのおきゃくさま あまんきみこ

2 単元目標

場面の様子や登場人物の行動、会話に着目して、きつねの気持ちの変容を読み取ることができる。

3 ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

研究課題・・・子どもが解決したい問題を持ち、友達とひびき合いながら学習する子どもの育成
手立て・・・子どもの願いや思いの育ちを見とった単元構想と授業作り
ブロックテーマ「感じる心、素直に表現する自分」

・人の言動に何かを感じる姿 ・自分の思いや他者からの刺激を受け止め、素直に表現する姿

<聴く・話すについての指導>

「聞く」のスタートである「人の話を黙って聞く」ということが、声かけを繰り返すことで全体的にできるようになってきた。また、「教師に向かってではなく、みんなに話す」ことには抵抗があっても、「話している人の方を見て聞く」ことは少しずつできるようになってきている。しかし、それは「聞く」であって、「聴く」までとはいかず、単に「聞こえている」という感じで、残念ながら話の内容を理解して聴くに至っていない。現在、耳に手を当て、聴こうとしている人の写真を掲示し、聴くことに意識が向くようにしている。また、話す・聞くルールは、児童との話し合いで決めて、黒板上に掲示してある。

また、大勢の前で話すことに慣れるようにするため、朝の会で簡単なスピーチ（順序に気をつけて話す）活動を行っている。最近は、平素の生活に生かせるようにと、短いやりとりではあるが対話する（話のキャッチボール）時間を設けるようにした。大きな声で話すだけでなく、スムーズに全体の前でも話せるように少しずつなっている。

国語科の学習においては、自分の考えや思いを積極的に発言できる児童は一部である。話し合いとなると、さらに減ってしまう。そこで、プリントやノートを事前にチェックし、花丸をつけて自信を持つことができるようにしたり、座席表にメモしてあるもので意図的指名を行ったりして、できるだけ多くの児童が話し合いに参加できるよう工夫している。

<これまでの関わり合い・ひびき合い>

国語科の学習では、物語文や説明文で初発の感想交流を丁寧に行ってきた。発言前にもう一度ノートを読み、隣席の児童と交流し、さらに全体での交流と順を追って、自信を持って発言できるよう工夫してきた。そして、少しでも友達と関わって学習できるようにと、「友達と同じかな、違うかな」と考えて聴くように声をかけたり、友達の考えにつけたししたり、同じでも「〇〇さんと同じで～」と言ってから、自分の言葉で発言するように促したりしてきた。また、児童には友達の思いや考えに対しては、まずは「いいと思います」（なるほど）と受け止め、それから「私は～」と発言するよう声をかけてきた。さらに、「違う」考えをも大切にすることで話し合いも深まっていく。それが、かかわり合い、ひびき合う姿の第一歩であり、そこから自分の思いや考えをより確かなものにしたり、より広げたり深めたり、あるいは変えたりしていけると考える。

児童は、これまでに「スイミー」と「たぬきの糸車」で、登場人物の気持ちや場面の様子を読み取る学習を行ってきた。しかし、話し合いでは、自分の思いや考えを発表し合うにとどまり、関わってひびき合うことで読みを深めるまでには至っていない。

4 単元と指導について

<単元について>

「きつねのおきゃくさま」は、同じ場面展開が繰り返される構造を持つ作品である。ひよこ、あひる、うさぎと順に登場人物が変わり、少しずつ内容が変化しながらも同じ場面展開が繰り返されていく。この構造は、昔話や絵本などに多く取り入れられており、児童にとっては先を予想しやすく、展開が非常にわかりやすいものになっている。また、繰り返しの構造によって、場面ごとのきつねの行動が比較しやすく、ひよこ達に対するきつねの関わり方が移り変わっていく様子が捉えやすい。

物語は、太らせてから食べるための「えさ」という存在でしかなかったひよこ達を自分の命と引き換えにしてまで、おおかみから懸命に守ろうとするまでにきつねの気持ちが変容していく姿が描かれている。このような行動をなぜきつねがとったのかを考える上で、重要なキーワードとして、「やさしい」「しんせつな」「かみさまみたい」「そのうえゆうかな」があげられる。これらの叙述から、「きつねの様子や気持ちの移り変わり」を、想像を広げて読み取っていくことができると考える。

また、主人公のきつねは最終的には死んでしまうが、「むかしむかし、あったとさ」や「とっぴんぱらりのぼう」など民話の語り口調を取り入れていることによって、この作品が悲劇的なストーリーで終わらず、一つのユーモラスな民話として読み手に語りかけていることも、作品を味わう上でとても適していると考えられる。

<指導について>

2年生になって、2つの物語文を学習してきた。その経験を通して、初発の感想は全員が書けると考える。しかし、お話の世界に素直に入っていけない児童もいるため、「きつねが動物の面倒を見るなんて初めて知った」「とっぴんぱらりのぼうがおもしろい」等、内容と直接関係のない感想が多く見られる可能性もある。そこで、感想を書くに当たって、「どんなきつねか」「心に残ったこと」「不思議に思ったこと」の3つの視点を与えることにした。そうすることで、きつねの気持ちの変容に関わる感想が増えると考えられる。そして、きつねとおおかみが戦った場面が心に残ったと答える児童も出てくるだろう。感想交流を通して、「きつねの気持ちが変わったのはなぜだろう」や「どうして、きつねはおおかみと戦ったのだろう」また、「きつねは、なぜ恥ずかしそうに笑って死んだのだろう」等の児童が解決したい問題が出てくることを期待したい。

みんなで話し合って解決したい問題に向けて、まずは「一人読み(書き込み)」を行っていききたい。そうすることで、これからの話し合いのヒントに、そして心のよりどころとなるに違いない。また、「いや、まだいるぞ。きつねがいるぞ。」は、誰のせりふなのかという問題も見つかるのではないかと考える。一人読みをするにあたっては、一人で重要なキーワードを探したり、その文章から想像してきつねの気持ちを考えたりする力が現状では不十分だと考えられる。そのため、着目させたいキーワード(きつねの気持ちが想像しやすい)を教師が与えるようにしたい。さらに、毎時間ごと、学習の最後に振り返りを行い、友達との関わりやその時間にわかったことを感想として、ノートに書き記していききたい。

本時は、「「どうして、きつねはおおかみと戦ったのだろう」」をみんなで話し合うところである。ここまでの学習を積み重ねてくることで、きつねの気持ちの変容ゆえに起きたということに着目していれば、よしにしたい。しかし、自分の思いを伝えるだけの発表会にならないよう、同じ考えでも、根拠となった叙述や自分なりに読み取ってきた理由をつけて発言するようにしたい。同じ意見の場合は、名前カードで見やすく掲示していく。読みを深めるまでに至らなくても、互いの意見を聴き合い、友達のいろいろな思いを受け止めている姿をひびき合いの姿としたい。

話し合いを円滑に進めるために、話し合いのルールを確認する。ペア交流を経て、全体で交流していく。また、「違う」考えを大切にするために、事前にそれぞれの考えを把握しておき、相互指名に加えて意図的指名を行っていくようにしたい。

単元目標

○場面の様子や登場人物の行動、会話に着目して、きつねの気持ちの変容を読み取ることができる。

初発の感想を交流し合い、学習計画を立てる①②

- ・ おおかみと戦って、きつねが死んじゃってかわいそうだった。 ・ きつねはおおかみと戦って勇敢だった。
- ・ きつねが強いおおかみを追い出してすごい。 ・ きつねは、どうして恥ずかしそうに笑って死んだのかな。
- ・ 3匹を食べようとしていたのに、なぜ戦ったのか不思議だった。

感想の視点を与える。

- ・ どんなきつねか
- ・ 心に残ったこと
- ・ 不思議に思ったこと

初発の感想を進んで書いている(関心)

どうして、きつねはおおかみと戦ったのだろう⑧(本時)

きつねは、なぜ恥ずかしそうに笑って死んだのだろう⑨

一人読みをし、きつねの気持ちを想像することができる(読む)

きつねの気持ちを考えよう(一人読み) ③④

それぞれの会話文を誰が話しているのかを理解する

着目させたい言葉

- ・ ぶるるとみぶるいした
- ・ すこしぼうっとなった
- ・ 心の中でやりとわらった
- ・ ひよこは、まるまるふとってきたぜ

着目させたい言葉

- ・ うっとりした
- ・ 五回もつぶやいた
- ・ ぼうっとなった
- ・ あひるも、まるまるふとってきたぜ

着目させたい言葉

- ・ うっとりして
- ・ 気ぜつしそうになった
- ・ ぼうっとなった
- ・ うさぎも、まるまるふとってきたぜ

- ・ 何が、やさしいお兄ちゃんだ、笑わせるな
- ・ おおっ、太ってきたぞ、しめしめ
- ・ えさが3匹になったぞ、ふふっ
- ・ ほめられるって、なんか気持ちいいな
- ・ もうそろそろ食べるか
- ・ おいしそうだ、もっと太れ
- ・ おれが親切だと
- ・ おれが神様だと、照れるぜ

きつねの気持ちを話し合おう⑤⑥⑦

ひよここと出会った時のきつねの気持ちを話し合おう

ひよこことあひるに出会った時のきつねの気持ちを話し合おう

ひよこことあひるとうさぎに出会った時のきつねの気持ちを話し合おう

きつねの気持ちの変容に気づくことができる(読む)

- ・ みんなを守りたい
- ・ もっとほめられたい
- ・ おれのえさを横取りするな
- ・ 助けたい
- ・ おきゃくさまから友達になったんだ
- ・ せっかく太らせたんだぞ
- ・ おれは、こいつらが好きになった

同じ考えでも理由を伝え合うことで、互いの思いを受け止めやすくする。

ひよこ、あひる、うさぎを守るために戦ったことを理解する。

きつねが死ぬ時、ひよこ、あひる、うさぎはどうしていたのかを想像しよう

- ・ みんなできつねを見守っていた
- ・ みんなで「ありがとう」と言った
- ・ やさしく、親切に、神様みたいに看病した

きつねの気持ちの変容を読み取ることができる(読む)

- ・ みんなをだましていたから恥ずかしい
- ・ ありがとう、みんな
- ・ みんなを食べようとしていたことが恥ずかしい
- ・ 負けて恥ずかしい
- ・ みんなが家族みたいで、うれしいよ
- ・ いいこととして、照れるぜ

きつねに手紙を書こう⑩

6 本時について

- (1) 本時目標 自分なりに読み取ってきたことを通して「どうして、きつねはおおかみと戦ったのだろう」を話し合い、きつねの気持ちの変容に気づくことができる。

(2) 本時展開

学 習 活 動	
きつねのおきやくさま めあて 「どうして、きつねはおおかみとたたかったのだろう」を話し合おう。 ・こころの中でやりとわらった ・おれのうちに来なよ ・やさしく ・しんせつ ・かみさまみたいみたいにそだてた ・ひよこは、まるまるふとってきたぜ ・あひるも、まるまるふとってきたぜ ・うさぎも、まるまるふとってきたぜ 今日の学習を振り返って、感想を書こう。 ・きつねは、自分をほめてくれたひよこ、あひる、うさぎを助けたかったということがわかった。 ・○○さんの考えを聞いて、きつねはみんなのことを友達みたいに思っていたことがわかった。 やさしい きつね	きつねのおきやくさま めあて 「どうして、きつねはおおかみとたたかったのだろう」を話し合おう。 ・こころの中でやりとわらった ・おれのうちに来なよ ・やさしく ・しんせつ ・かみさまみたいみたいにそだてた ・ひよこは、まるまるふとってきたぜ ・あひるも、まるまるふとってきたぜ ・うさぎも、まるまるふとってきたぜ 今日の学習を振り返って、感想を書こう。 ・きつねは、自分をほめてくれたひよこ、あひる、うさぎを助けたかったということがわかった。 ・○○さんの考えを聞いて、きつねはみんなのことを友達みたいに思っていたことがわかった。 いやな きつね
気持ち が かわった 	
「いやまだいるぞ。きつねがいるぞ。」 ・ゆう気がりんりんとわいた せつかくふとらせたんだぞ、おれのえさをよこどりするな はじめはたべようとおもったけど・・・ ・みんなをまもりたい ・たすけなきや ・おれはこいつらがすきになった ・もっとほめられたい ・おきやくさまからともだちになったから ・かぞくみたいな気持ちになったから	
主な支援・留意点【評価】 ○今日のめあてを確認する。 ○順番に一文読みで全文を読む。 ○全体で話し合う前に、ペア交流をして、話すことに慣れるようにし、自分の考えや意見に自信をもてるようにする。 ○根拠となる叙述や自分なりに読み取ってきた理由も発表するように声をかける。 ○話し合いが停滞するようであれば、「いやまだいるぞ、きつねがいるぞ。」の会話文を取り上げて考えるようにする。 ○さし絵をよく見るように声をかけ、ひよこたちの様子を考えるようにする。 ○わかりやすい板書を心がけ、名前カードを活用する。 ○クラスの話し合いを意識し、みんなの方を向いて、話すように声をかける。 ○「なるほど」「同じ」「違う」を意識して、聞くよう声かけをする。 ○進んで発言できない児童には意図的指名を行う。 ○きつねの「食べる気満々度」を確認する。 ◇問題について自分の考えを持ち、進んで話し合いに参加しようとしている【関】 ◇きつねの気持ちの変容に気づくことができる。【読】	

7 実践を終えて

<初発の感想を生かして>

これまでも、物語文だけでなく、説明文においても初発の感想を書かせてきた。その成果が出て、全員初発の感想を書くことができた。また、感想を書くに当たって、「どんなきつねか」「心に残ったこと」「不思議に思ったこと」の3つの視点を与えたことで、しっかり物語文の内容に関係した感想を書くことができた。「きつねは優しい」「勇敢だ」「おおかみから皆を守ってかっこいい」と、きつねの気持ちに寄り添った感想が多く見られた。そのため、感想交流では、全員の感想を交流し合うことができ、きつねに好意的な雰囲気話し合いを進めることができた。その中で、早くも「きつねは皆を食べたいので、おおかみにとられないように戦った」「きつねは皆を守るために戦った」と二つの意見に分かれて話し合いが深まりそうな勢いだったが、学習課題を「どうして、きつねはおおかみと戦ったのだろう」「きつねはなぜ恥ずかしそうに笑って死んだのだろう」の2つの課題にしぼり、さらにどういう流れで学習を進めていくかを決定した。

<児童の心が大きく揺れ動いた>

本時の課題は「どうしてきつねは、おおかみとたたかったのだろう」であった。この問題は、初発の感想交流の時から、児童の注目度は高く、自分の考えたことを言いたがっていた。児童はここまでに、1人読みをした後、きつねの気持ちを想像し話し合いを重ねてきている。ただ、まだ2度目となる1人読みのため、着目させたい言葉（キーワード）を与えての1人読みだった。ひよこ、あひる、うさぎと順に登場人物が変わり、少しずつ内容が変化しながらも同じ場面展開が繰り返されてきたのでわかりやすかっただろう。また、同じ言葉でありながらも、ささいな言葉の遣い方の違いをも捉えることができていた。その中で、児童は食べる気満々のきつねの気持ちを感じながらも、うまく言葉に言い表せていないが「ぼうっと」「うっとり」「気ぜつしそう」になっているきつねの気持ちをも感じとっていたと思う。

本時は、きつねの気持ちの変容に気づかせたい場面である。しかし、事前に児童の考えを把握した時には、「自分が食べるえさをおおかみにとられたくないから戦った」の意見が多く、「みんなを守るために戦った」はわずか5名だった。そこで、児童の心を揺さぶるために、きつねの「いや、まだいるぞ、きつねがいるぞ。」の言葉を取り上げることと、木の陰で逃げることなく、きつねの戦いを見守っている三匹の様子が描かれたさし絵を活用していくことを念頭に入れて授業に臨んだ。

本時で、児童の心が大きく揺さぶられ始めたのが、「食べるために、ずっと一緒にいたから家族みたいになっちゃった」という考えを聞いてからだった。そして、さし絵の大きなおおかみに戦いを挑んでいるきつねやきつねを見守っている3匹の様子をみんなでもう一度確認した時である。さらには、きつねの自分を「おとり」や「犠牲」にしたせりふであった。「おとり」という言葉が児童から出たり説明し合ったりで、これには、多くの子が、「ああ〜。」と盛り上がった。大きなおおかみとの命がけの戦いに目が向けられ、もはや「えさ」のためではなく、「仲間のため」というきつねの気持ちに気づき始めた。「きつねの気持ちは変わったんじゃないの」「先生、考え変えていい」の声も多く出てきた。そして、「先生、どっちなんですか。」という声があがった。結論を早く知りたい子たちが出てきたのである。ちょうど、学習時間も終わりに近づいてきたため、まとめにとりかかった。児童は、きつねの食べる気満々度は「0」になり、きつねの気持ちの変容したことを読み取ることができた。

最後まで問題解決に取り組んでいた児童の様子から、本時の課題は子どもの解決したい問題となっていたと考える。また、ひびき合いによって、子どもの変容も充分見られたと感じた。

<成果と課題>

大きな成果としてあげられるのは、やはり、友達の考えや意見を受け止める言葉、つなぐ言葉を駆使して、互いの考えや意見をひびき合わせることができたことだ。そのため、「家族のよう」「仲間」「おとり」「犠牲」等、奥深い言葉を受け止めて、きつねの気持ちの変容を捉えることができたと考える。

児童はやはり自分の考えや意見を言いたいものである。今回、せっかく児童の気持ちの変容が見られ始めたところで、再び「食べるために戦った」と元に戻ってしまうということがあった。流動的な話し合いの中で、前の話題について言い足りない児童を立ち止まってどう扱っていくのが課題となった。名前カードを活用し、黒板に意見の立ち位置を示していくというアドバイスをいただいた。しかし、発言できない児童はそれで満足できると思うが、発言したい児童の扱いは、もう少し慎重に考えていかなければならない。児童も納得できる手立てを考えていきたい。